

氏名	JANG Bitna (ジャン ビンナ)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第83号		
学位授与日	令和2年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論文題目	木のエネルギーを陶によって表現すること —自作における「抽象表現」と「有機的」の相関性について考える—		
審査委員	主査	教授	木下 京子
	副査	教授	濱田 芳治
	副査	和歌山県立近代美術館 学芸員	奥村 泰彦
	指導教員	教授	井上 雅之

内容の要旨

本研究の目的は、タイトルでもある「木のエネルギーを陶によって表現すること」である。「陶」は私が継続して取り組んでいる表現素材であり、私にとって最も魅力的な材料である。それゆえ、私は「陶」による立体作品を制作しているが、その形は、私が木を前にしたときに感じ取る「何か」に基づいている。私が特定の木を前にした時に感応する「何か」とは、私と木がその場その時を共有していることであると考えている。その経験を「陶」で表現することによって、その場その時の感情や印象を作品の中に保つことができるのではないかと。「陶」とは、言い換えれば、土を焼く技術から誕生した素材の一つである。焼かれた土には制作者の行為による感情が秘められており、手や肉体を通して産み出された創作という新たな「何か」が加わっているのだ。本研究の動機と目的において重要なキーワードは、この「何か」であり、それは本研究の起点でもあり、軸となると考える。その「何か」とは、「エネルギー」と言い換えられるものである。

「エネルギー」とは、科学的な概念でもあるが、その一方で、活動力や精力、勢いなどを指す言葉として日常的に用いられている。同時に、あらゆる生物が生きるための原点となるものを意味し、無生物の場合は、ものの持つ歴史やものにまつわる人々のストーリーを意味することもある。したがって、この世に存在する全てのものは、個々に固有のエネルギーを持っていると私は考えている。大きさ、強さ、あり方など様々な種類のエネルギーが様々な場所に存在しているはずだ。現代の人々はものの持つエネルギーをどれほど意識しているのか。私にとってエネルギーとは、場所と時間、その対象によって変わるものである。すなわち、必然的と同時に瞬間的に発生すると言える。そのため、私は自分だけが感じる「エネルギー」をとっても重要だと考えている。

本研究では「エネルギー」を基軸にして、「生(せい)が感じられるもの」、「土が焼かれること」、「表現すること」という三者の関係について論じる。そして陶による制作を見つめ直すことで、「陶」と「表現」の関係を新たに構築することを目的とする。

本研究では木から感じられるエネルギーを陶による作品として形象化するための方法論として、「陶表現」の制作過程とその現象について探究する。そして、「抽象表現」と「有機的」という言葉の相関性を考えることで、その原理の理解を深めることを目標とする。研究を進めるアプローチと

して、「陶表現」を行っている作家にインタビューを行い、作家自身の意見を参考にして本研究のテーマを読み解く。

第1章では木と人の関係を考察し、中でも巨木の持つエネルギーに注目した。エネルギーについて調査・分析したことから、「木のエネルギー」が意味することを明確にする。

第2章では、「陶表現」について論究する。自作を客観視するのに不可欠な三人（井上雅之・中井川由季・中島晴美）の作家研究を行い、陶表現を「技法」・「モチーフ」・「表現特徴」の三要素で分析する。それに基づき、自作における陶の材料的特性と表現の優位性について論述する。

第3章では、「自作論」を多角的に考察する。第1節では自作の制作プロセスを時系列で分析することで、自作と「モチーフ」の関連性を論じる。そこで得たことを中心に、自作とモチーフの関係を考察する。第2節では、自作と「抽象表現」について論じる。カンディンスキーと井上雅之の作家研究を行うことで、「抽象表現」を理解し、「抽象表現」と「陶表現」の相関性を考える。第3節では、自作と「有機的」について考察する。自作を見た鑑賞者の多くから「有機的」と言われた経験をきっかけとして、日本語の「有機的」という言葉に対する意味を調査し、自作における「有機的」の意味を新たに定義する。さらに、「有機的」に対する制作者と鑑賞者の捉え方を比較することで、その意味の理解を深める。第4節では、最終成果作品《力への意志》に焦点を当て、自作における「抽象表現」と「有機的」の相関性について論述する。

終章では、以上を踏まえ、「木のエネルギーを陶によって表現すること」のための自作論をまとめ、本研究の結論を導く。

審査結果の要旨

本論文の直截的なタイトルが示す通り、張ビンナ氏は「木のエネルギー」を表現するために「陶（とう）」による作品制作を行い、その制作活動を「陶表現」と呼んでいる。「陶」という言葉をあえて使うことは、「陶芸」や「陶磁器」の一般的認識から一線を画すためである。張氏は韓国の建国大学デザイン造形学部工芸学科で学んだが、「ろくろ成形」・「石膏型取り」・「立体（自由）造形」がカリキュラムの中心であったことより、器や花瓶なども制作していた。しかし「立体（自由）造形」への志向性が強く、学部卒業後の進路として韓国国内の大学院ではなく、多摩美術大学の大学院を選んだ。それは本学工芸学科教授の井上雅之氏に師事するためである。付録にある井上雅之氏へのインタビュー内容からも、張氏が井上氏の影響を強く受けているかを窺い知ることができ、彼女にとっていかに大きな存在であるかが理解される。

第一章では、表現の主体となる「木のエネルギー」について論じている。韓国人の張氏が異なる文化の日本で学び、制作を続けていく上で、否応なしに言語の壁にもぶつかる。自身の作品に向けられた言葉に敏感に反応し、日本人が当たり前のこととして使う言葉にも、他の言語にはない日本語独自の意味やニュアンスがあることをつきとめ、それを明確にしている。特に「エネルギー」は張氏の「陶表現」を行うにあたり精神的支柱とでもいえるべき言葉であり、語源にも遡り分析を行っている。言葉が放つ意味を繊細に受け止め分析を行うことは、実は張氏が自身の作品のコンセプトを熟考し、補強する作業でもあったように見える。張氏にとって「目に見えないものを形にする」こととは、最終的には「陶」で実際のものを作るということであっても、漠然としていることを整理するために、そして思考を深化させるために、言葉を追うことは有効なプロセスであり、この結果、作品の強度を高めることに繋がったのではないかと。

第二章では「陶表現」について掘り下げ、さらに自作と関連する作家として井上雅之氏、中井川由季氏、中島晴美氏を取り上げて、それぞれの作品から「陶」の材料的特性と表現の優位性

について述べている。この執筆に伴い、この3名の作家それぞれにインタビューを行い、それを付録として掲載してことは貴重な記録となった。

第三章の「自作論」が最も重要な章であり、本論文の中心となる。張氏の作品を時系列に見ていくことで、「モチーフ」をどのように捉えていたのか、対象への意識とその思考の変遷を辿ることができる。表現するものが、表現したいものが木の外観ではなく、その中にある「目に見えないもの」、すなわち「エネルギー」を「陶表現」することを自覚したことで、「抽象表現」に結びついた。また、カンディンスキーと井上雅之の作品に共通性を見出し、カンディンスキーの著作より「有機的」という言葉を引き出したのである。この「有機的」も張氏が自身の作品に対して頻繁に言われて脳裏に突き刺さっていた言葉であったことより、様々な角度から「有機的」について考察し、自身の作品に照射させ分析している。そして博士課程在学中の最終制作となった《力への意志》に一節を割り、思考のプロセスと技術面を併せて論じている。本作はモチーフとなる対象物が実存せず、視覚的イメージが固定されておらず、表現のコンセプトも具体的に決めないことを前提にして、作られた初めての作品であり、制作手法も新たな試みを取り入れ、張氏にとっては挑戦的な作品となった。また、《力への意志》の制作を行ったことで、「抽象表現と有機的の相関性」について思考が及び、次の、あるいは今後の作品制作において、自身のスタンディング・ポイントを見つけることができたように思われる。

張ビンナ氏の博士論文は、極めて主観的な考察に基づき論旨が進められている。論考内でも自身を「筆者」ではなく「私」と表現し、「制作者の私」が視座の中心である。客観的論証に欠け、学術的な検証もなく、賛否が分かれる論文であろう。しかし、制作者が書く博士論文としては、理想的な形で執筆することができたように思う。つまり論文の執筆が実制作に直接反映され、作品に活かされ、張氏にとって論文を書くことも制作活動の肥やしになったのだ。張氏は自分自身に真摯に向き合い、あくまでも作品制作を通して思考し、文中のどの言葉にも実感が伴い、嘘がない。本論文に結論らしい結論がないのも、張ビンナ氏はこれから先も作家として制作を続ける以上、むしろ明解な結論を導くことができなくて当然なのかもしれない。惜しむらくは、井上雅之と張ビンナの作品の比較研究がなされなかったことである。これそが緻密に検証すべき事項であり、客観的な眼を持って論述すべきであった。しかしその一方で、これを論じることができるようになるには、張ビンナ氏がさらに作品を生み出してからではないかと答えは出ないのではないかと、とも思う。これは、張ビンナ氏に課せられた近い将来の宿題である。

最後に、中井川由季氏がインタビューで、「…論文以上にならない作品だったら文章だけでやればいい話になっちゃうじゃない」と仰っておられたが、制作者が執筆する論文とは、まさしくこの一言に尽きるのではないかと。

張ビンナ氏が博士課程の修了制作として提出した作品と論文を、実技の指導教員、論文主査、論文副査、外部審査員の4名は学位取得にふさわしいと認めた。今後の張ビンナ氏の作家活動に期待している。

(木下 京子)